暖かな恋

佑紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暖かな恋

【Ｎコード】

Ｎ９８９３Ｄ

【作者名】

佑紀

【あらすじ】

お互いに互いが気になる幼馴染の春斗と瑞穂。でも２人とも自分の気持ちが何なのかは分からない。そんな２人を中心とする物語。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１：秋月　春斗

「秋月」

遠い場所から誰かの声がかすかに聞こえてくる。注意してないと聞こえないような声で何度も何度も俺の名前を呼んでいる。

「秋月、いいかげんに起きろ」

その声で我に返り一瞬で目が覚める。そして、そのまま少しだけ青ざめてしまう。

「私の授業中に居眠り中とは随分えらくなったんだな」

目の前では怒った顔で数学担任の松木が俺を見ている。

「すいません・・・・」

俺はなるべく反省しているように見える態度でそう言った。周りではクラスメイトが笑っているのが聞こえてくる。もうちょっと声を落とせといいたくなっていまう。

「本当にそう思ってるのか？」

松木はさっきより少し平常に近づいた顔で俺に問いかけてくる。

「もちろんですよ。次からはもうしません」

「その言葉忘れるなよ」

松木はそう言って黒板の元へと戻っていく。
俺はほっとしながら黒板の方に目を移す。そこにはまったく理解できない数式や言葉が並んでいて目が回りそうになった。

授業終了を告げる鐘が鳴ってすぐに俺の席に1人の女子が近づいてきた。

「松木先生の授業で眠るってすごい度胸ね」

俺に親しく話しかけているのは、幼馴染の朝日　瑞穂。本当は1つ年上なのだが1年の海外留学をして俺達と同学年になった。瑞穂は誰もが認める美人で勉強もかなりできる。特に英語に関しては全国模試で3番をとったほどの実力の持ち主である。幼馴染でありながら俺からはとてつもなくかけ離れた存在である。

「眠るつもりじゃなかったなかったんだけどなぁ・・・」

「でも呼び出しされないだけ良かったんじゃない？」

「それも、そうかな。呼び出しされたら帰るのが1時間は遅くなってたな・・・」

「そうね。それより春斗、弁当食べない？」

「え、もう昼休みなのか？」

「うん。ほとんど眠ってた春斗には分かってないと思ってたけど」

「まじかよ。でも、なんとなくお腹は空いてるや」

「じゃあ、食べましょう」

そう言って瑞穂は持っていた鞄から弁当箱は2つ取り出した。そして、そのまま1つを俺に手渡した。

「いつも、ありがとな」

俺はそう言ってから瑞穂から弁当を受け取った。

「あ、言うの忘れてたけど、今日は私が作ったからね」

それを聞いた瞬間に箸が止まる。

「あれ、どうかした？」

俺のおかしな行動を不審に思ったのか瑞穂がそう聞いてくる。

「いや、なんでもないよ」

俺はなるべく落ち着き払った声でそう言った。そして震える手で弁当箱を開けた。

「見た目は普通なのに・・・」

俺は小さな声でそう言った。隣にいる瑞穂にも聞こえていないらし

く美味しそうに自分が作った弁当を頬張っている。

見た目は美味しそうである。確かにそれは頷ける。でも味は多分やばい。

瑞穂は他の人とかなりかけ離れたおかしな味覚をしていた。そのため他人が聞いたら驚いてしまうような味付けを好みたった1人だけ美味しそうに食べるのである。

「・・・・・・」

俺は手を付けられぬまま弁当箱を見つめている。隣では瑞穂が本当に美味しそうに食べている。俺は勇気を振り絞り玉子焼きを口に運ぶ。

「パクッ」

口に含んだ瞬間に嫌な味が口の中に広がってくる。甘いようなそれでいてしょっぱいような味が恐ろしいスピードで。

「なぁ瑞穂、どうして今日はお前がつくったんだ?」

俺はやっとの思いで玉子焼きを飲み込み瑞穂にそう尋ねた。

「お母さん、今日から友達と旅行に出かけるから、準備が忙しくて作れなかったの」

なるほど。瑞乃さんは旅行に出かけるのか。それなら瑞穂しか弁当は作れないか。

「へぇ、いつごろ帰ってくんの？」

「1週間後って言ってたよ」

つまり、1週間は瑞穂の弁当を食べさせられるわけか。

「じゃあ、今日の夜はどうするんだ？」

「それも私が作るわよ」

「・・・・・・・・」

まじかよ。昼だけじゃなく夜も瑞穂の料理か。

「じゃあ、その間の夕食は俺も作るの手伝うよ」

「ありがとう」

瑞穂はそう返事してから弁当を食べるのを再開する。それに続いて俺も弁当を食べるのを再開する。

頑張って瑞穂の弁当を食べた俺は午後の最初の授業を保健室で迎えた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２：朝日　瑞穂

数学の授業中はほとんどの生徒が睡魔と戦っているように見える。その中で１人私の幼馴染だけが戦いに破れ夢の世界へと旅立っている。

「秋月」

気付いた松木先生が春斗を起こそうと声をかけている。しかし、春斗はなかなか夢の世界から戻ってこない。先生が不機嫌になっていくのが声から分かる。

「秋月、いいかげんに起きろ」

その声で春斗がやっと起きる。少しだけ顔が青ざめてるのは気のせいだろうか。

その後、松木先生は春斗にいろいろ言ってから黒板の方へと戻っていった。

授業が終わってから春斗と弁当を食べようと思い、彼に近づいていく。

「松木先生の授業で眠るってすごい度胸ね」

「眠るつもりじゃなかったなかったんだけどなぁ・・・」

「でも呼び出しされないだけ良かったんじゃない？」

「それも、そうかな。呼び出しされたら帰るのが1時間は遅くなってたな・・・」

「そうね。それより春斗、弁当食べない？」

「え、もう昼休みなのか？」

本当に分かっていないようだ。まぁ、春斗は今日の午前中の授業をほとんど寝てすごしていたからしょうがないのかもしれない。

私は食べようと提案してから鞄から2つの弁当を取り出し、そのまま1つを春斗に渡す。

「いつも、ありがとな」

春斗は笑顔でそう言い、私から弁当を受け取った。

私の1つ年下の幼馴染の秋月　春斗は3年前に両親を事故で亡くしていた。その頃から食事の面では私の家族が面倒を見ている。私のお母さんも小さい頃から春斗を可愛がっていたし高校生になってからは弁当も作ってあげている。お母さんがいない時は私が作るのだけど春斗は私の料理に関しては美味しいと言ってくれたことがない。私は美味しいと思うのだけど。

「なぁ瑞穂、どうして今日はお前がつくったんだ？」

突然、春斗がそんな事を聞いてきた。少しだけ顔が苦しそうなのは

どうしてだろう。

「お母さん、今日から友達と旅行に出かけてから、準備が忙しくて作れなかったの」

春斗は少しだけ何かを考えてからまた口を開いた。

「へぇ、いつごろ帰ってくんの？」

「1週間後って言ってたよ」

また考える顔になってる。一体何が不思議なのだろう。

「じゃあ、今日の夜はどうするんだ？」

「それも私が作るわよ」

「・・・・・・・・」

春斗はまたまた考える顔になり、少しして口を開く。

「じゃあ、その間の夕食は俺も作るの手伝うよ」

私はその言葉を聞いて驚いた。普段なら春斗がそんな事をいうことはなかったから。

「ありがとう」

私は素直な気持ちでそう言った。言ってから恥ずかしくなりそれを隠すために弁当を食べる方に集中した。隣では春斗も弁当を食べる

のを再開したようだった。

どうしてか分からないけど昼休みが終わる頃、春斗は保健室へとかけていった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３：春斗&新藤　竜馬

「お～い、春斗。大丈夫か？」

午後の最初の授業が終わった後の休み時間。保健室のベッドにお世話になっている所に友達である新藤　竜馬がやってきた。

「いや・・・まだ痛い。瑞穂は一体何を弁当に入れたんだよ」

「相変わらず朝日さんとはラブラブだな」

竜馬はにやけた顔でそう言った。その顔に思いっきりパンチをしたくなる。

「どう見たらそう見えるんだよ」

「普通に見てたら」

「あっそ」

真剣に相手をするのが間違っている。相手は竜馬なのだから。

「じゃあ、俺は教室戻るけどお前はまだここにいるの？」

「あぁ、さすがに授業はまだ受けられそうにない」

「ＯＫ、先生に伝えといてやるよ」

「あぁ、悪い。ありがとな」

「お礼はいらないから、誰か可愛い子を紹介してくれ」
最後にそう言って竜馬は教室へと走って戻っていった。

午後の2番目の授業（5時間目）の終了を告げる鐘が鳴った。既に俺のお腹も回復しており次の授業からは参加できそうだった。
俺はベッドから降りて保健室を出て自分の教室へと向かう。1階にある保健室から俺の教室にある3階までは腹痛が治まったばかりの俺にはそこそこきつかった。
やっとの思いで階段を登りきり自分の教室へと向かう。引き戸のドアを開け中に入る。すると俺に気付いた瑞穂が駆け足で俺の側へと寄ってくる。

「もう大丈夫なの？」
瑞穂は心配した顔で俺にそう尋ねた。2時間授業を休んだだけなのに大袈裟すぎないか。
「大丈夫だけど。どうしたんだ、お前？」
「皆が春斗は多分、私の作った弁当を食べたから保健室へ行ったんだって言うから」
「・・・・・・・」

確かにそうだけど、そんな顔で言われると正直な答えが出せるはずがない。

「今日は朝からお腹の調子が悪かったからだよ。瑞穂の弁当のせいじゃないって」

「本当？」

瑞穂はまだ心配顔のままでそう尋ねてくる。

「あぁ、だから気にするなって」

「うん・・・でも・・・」

「本当にお前の弁当のせいじゃないって。仮にそうだとしたら俺は今までにもっと保健室に通ってるだろ？」

「それはそうだけど・・・」

「だからお前の弁当のせいじゃないって。気にするな」

「うん・・・分かった」

瑞穂は渋々だったがやっとのことで了解してくれた。

自分の席へ戻ると竜馬がさっきのにやけ顔で近づいてきた。

「何だよお前、そんな気持ち悪い顔して」
俺は竜馬の顔を見ながらそう言った。
「相変わらずラブラブだねぇ」
その台詞2度目だろ。
「さっきから煩いな。そんなんじゃないって」
「照れるなよ。それよりお前に頼みがあるんだ」
「可愛い子紹介だったら無理だぞ。そんな子知らないから」
「違うって。今日合コンあるんだけど男子1人足りないわけよ」
「嫌だ。俺、そういうの好きじゃないから」
「そう言うなって。可愛い子紹介の代わりだと思ってさ」
「俺、紹介すると言った覚えもないけどな」
「いいじゃん。親友の頼みなんだから」
そう言って竜馬は少しだけ頭を下げる。頼むならもう少し下げろよ。
「俺以外の奴誘えばいいだろ」
「だってさぁ、連れて行くならそこそこは格好良くないと」

「俺は格好良くないから無理だな」

「何言ってんだよ。そんなんだったら誘わねぇよ」

サラリと凄いことを言ってのけるな。世の不細工人間を侮辱してる・・・

「あ、そういえば」

「どうかした？」

「俺、今日瑞穂と放課後買出しに行くんだった」

俺は断るために嘘をつくことにした。実際に2人で買出しに言ったりすることもあるため、この嘘はかなりの高確率で騙すことができる。

「まじ。それならしょうがないか」

「あぁ、悪いな」

「いいって。さすがに夫婦の仲を引き裂いてまで誘うのは悪いしな」

そう思ってんならそもそも合コンに誘うなよ。

「別に夫婦じゃないけどな」

「照れるなよ」

そう言いながら竜馬は自分の席へと戻っていった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４：瑞穂&結城　風歌

「瑞穂」

放課後になって少しだけざわついてる教室で友達の結城　風歌が私に声をかけてきた。

「どうしたの、風歌？」

少しご機嫌な風歌の顔を見ながら私はそう尋ねた。

「今日、帰りって暇？良かったら遊びに行かない？」

「う～ん、行きたいんだけどさ。今日、家にお母さんがいなくて自分で夕食作らないといけないから早めに帰らないといけないの」

「えぇ、少しぐらいいいじゃない」

「私だけだったらいいんだけど。春斗の分も作らないといけないから」

「それもそうか。旦那様の迷惑になっちゃいけないよね」

「また、そう言ってからかうんだから」

「あら、本当の事じゃない」

風歌はいつも春斗の事を旦那様と言って私をからかってくる。その

度に私もいろいろと言うんだけど私が勝った試しなんて1度もない。

「違うわよ」

「ふふふ、どうかしらねぇ」

「もう」

「ごめんごめん、そんなに怒らないで。瑞穂見てるといつもからかいたくなってさ」

「それって謝ってるつもりなの？」

「う～ん、分かんない」

そう言ってから風歌は1人で笑い始めた。

「じゃあ、私帰るね」

ひとしきり笑ったあと、風歌は笑顔でそう言って教室から出て行った。

私は帰る準備を終えて自分の席に座っている春斗の元へと近づいた。春斗はそんな私に気が付くと立ち上がり何も入っていなさそうな薄っぺらい鞄を持ち上げた。

「ねぇ、春斗。その鞄って何が入ってるの？」

私の質問に春斗は一瞬だけ変な顔をしてから口を開いた。

「弁当箱が入ってる」

「それだけなの？」

「うん。教科書とか持っていっても必要ないし」

「・・・・・」

私が呆れて何も言わないのを見てまた春斗は変な顔になった。

「どうかしたの？」

「ううん、なんでもない。それより帰ろう？」

「あぁ」

春斗はまだ怪訝そうな顔をしていたけどそれ以上は追求してこなかった。

「あ、そういえば」

校門を出て少し出たところで私は大事な事を思い出した。

「どうかした？」

さほど興味なさそうな顔で春斗が私にそう尋ねてきた。

「お家にもう食材残ってないから買出しにいかないといけないんだった。春斗、ちょっとだけスーパーに寄ってもいい？」

「あぁ・・・」

春斗の返事には少しだけ驚いたようなニュアンスが混じっている。

「どうかした？」

私は何かあるのだろうかと思い尋ねてみる。

「いや、何でもないよ」

春斗はそう言ったけど、私はその後に彼が呟いた言葉を聞き逃さなかった。

「嘘からでた真ってやつか？」

一体、何の事を言っているのか私には理解できなかった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５：春斗&タイムサービス

「なんだこの込み様は・・・」

瑞穂と買出しのためにスーパーにやってくると、そこは多くの人で溢れていた。

「なんだろうね。今日、タイムサービスでもやるのかな？」

調子を狂わせるようなゆったりとスピードで瑞穂がそう言った。今の瑞穂にタイムセールに参加させたら入り口で脱落だなと考えてしまうほどだ。

「この店ってタイムサービスやってんのか？初めて聞いたけど」

「私も聞いたことないけど」

「あっそ・・・・」

じゃあ何でそんな事を言ったんだろうか。

「でも、本当に何があるんだろうね？」

「さぁな。とりあえず入ってみないか？」

「うん」

瑞穂の返事を合図に俺たちはスーパーの入り口に向かい歩き出した。が、行けたのは入り口までだった。あまりに凄い人込みで入り口に

全然近づけない。

「どうしよっか？」

困ったような顔をしながら瑞穂がそう尋ねてきた。

「本当にタイムサービスでもありそうだな。とりあえず聞いてみるか」

俺はそう言ってから周りを見渡し優しそうなおばさんを見つけた。

「すいません、今日って何か特別な日なんですか？」

「えぇ、そうよ。このお店がねタイムサービスを始める事になったの。今日はその初日でね、とっても安く売るんだって。だからこうなってるのよ」

「そうなんですか。タイムサービスはいつから始まるんですか？」

「あと１０分後ぐらいには始まるわよ。店が開くのが合図よ」

「そうなんですか。ありがとうございます」

俺は笑顔でそう言ってから瑞穂のいる場所へと戻ってくる。

「お前の言ってたタイムサービスで正解らしいよ」

「へぇ、何時からなの？」

「１０分後だけど。お前、まさか参加する気じゃないよな？」

「するに決まってるじゃない」

まじかよ。今日のタイムサービスに参加したらおばさん達の勢いに絶対やられると思うんだけどな。一歩間違ったらトラウマかかえてしまいそうなぐらい。

「へぇ、頑張れよ。応援してる」

「どうして私だけ参加するのよ。春斗も参加するんだからね」

「えぇ。しないと駄目か？」

「うん」

諦めるしかない。瑞穂は妙に頑固な所があるからねばっても結局参加するはめになるだろう。

「何もとれなくても怒んなよ」

「うん」

今、気付いたのだけど瑞穂はどことなく楽しそうな雰囲気である。もしかしてタイムサービスに参加できるのが嬉しいのだろうか。

「只今よりタイムサービス開始です」

その合図を皮切りに並んでいた客（俺と瑞穂も含む）が一斉に店内へと流れていく。この中にいれば歩かなくとも店内に入れそうな勢いである。

「瑞穂、大丈夫か？」

俺は苦しそうにしながら進んでいる瑞穂にそう尋ねた。

「うん、なんとか」

瑞穂は本当に苦しそうにそう言った。

外にいた客がほとんど中に入った頃、店内にアナウンスが流れた。おそらくこれでタイムサービスの商品を放送していくのだろう。

「今日のタイムサービスは店内にある商品全部です。全て９割引で販売します。９割引で全商品を販売します」

このアナウンスに客がざわめく。そして周りにある商品を確認もせず取っていく。おばさん達のほとんどは必死になっていて凄い形相である。

「瑞穂、とりあえず俺たちも適当に食材をとってこよう」

俺はそう言って籠を持っている逆の手で瑞穂の手を掴み食材コーナーへと走っていく。人が邪魔になってなかなか進めないがなんとか食材コーナーの前まで辿り着いた。

「よし、瑞穂。手当たり次第にカゴにいれよう」

俺はそう言ってから食材を掴もうと手を伸ばす。しかし、1つもなかった。

「はや・・・。おばさんパワー恐るべしだな」

そう呟いてから瑞穂の方をむくと少しだけ頬を赤く染めながらボーっとしている。

「おい、瑞穂。どうしたんだ？」

そう言っても瑞穂は聞こえていないのかまだボーっとしている。

「おい、瑞穂」

さっきより声を大きくしてみる。すると、

「あ、ごめん。ボーっとしてた」

「どうかしたのか？顔赤いけど」

「ううん、なんでもない。ちょっと熱気が凄くて」

「あぁ、確かに凄いな。それより食材もうないんだけど」

「あれ、本当だ。他のところで買うしかないね」

「あぁ、そうだな」

もうちょっと悔しがるかと思ったけど以外に普通の反応をしめした瑞穂に俺は少し拍子抜けだった。

俺達はあの後、結局少し離れたデパートの食品館で買い物をすませた。

その時も瑞穂はずっとボーっとしていたけど本当にどうしたのだろうか。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６：瑞穂&ドキドキ

スーパーで春斗に手を握られてからどうも私はおかしくなっている。春斗を見ることができないし、ずっとドキドキしている。

「どうかしたのか？」

春斗は私に何度もその質問をした。私はその度になんでもないと答えたけど春斗はずっと心配そうな顔をしていた。

私の家に到着してから私はすぐに自分の部屋に入った。普段ならめったにそうしないが今日はどうしてもそうしたかった。春斗の側にいると落ち着かないからだ。

「瑞穂、流し台借りるぞ」

下の階から春斗の声が聞こえる。返事をしようと思ったけど出来なかった。

それから3分ほど経った頃だった。

「コンコン」

私の部屋のドアをノックする音が聞こえた。ノックの主は当たり前だが春斗である。

「入ってもいいよ」

私がそう返事するとドアを開いて春斗が部屋に入ってきた。

「お前、やっぱり気分でも悪いのか？いきなり部屋にこもって」

「ううん。ただ忘れないうちにやっときたい事があって」

「そっか」

「うん。ごめんね心配させて」

「いいって。じゃあ俺は下の階行っとくから」

「うん。私もすぐに行く」

私のその返事を聞いてから春斗は頷いて部屋を出て行った。

１０分ほどしてから私も１階へとおりることにした。

下に下りるとリビングでソファに座って春斗がお笑い番組を見ていた。そんなに面白くないのかただテレビを見つめているような感じだった。

「春斗、ご飯作るけど何が食べたい？」

私はテレビを見ながらボーっとしている春斗にそう声をかけた。私

の声に反応して春斗はこちらを向き少しだけ考えてから口を開いた。

「う～ん。なんでもいいよ」

「そう、じゃあ適当に作るわね」

「うん」

春斗はそう返事するとまたテレビの方に顔を向けた。しかし、そうしたのも束の間でいきなり立ち上がりこちらに走ってきた。驚く私をよそに春斗は焦った口調で話し出した。

「待て、今日は俺も一緒に作ってやるよ」

そう言えば、学校でそんな事を言っていたのを思い出す。

「そうだったね。じゃあ一緒に作ろうか」

「あぁ」

返事をしてから春斗はほっとしたような顔になった。何をそんなに焦っていたのだろうか。

「なぁ、カレーの作り方ってどこに載ってるんだよ？」

私たち2人は結局、カレーを作ることにした。なぜかというと、春斗が簡単な料理がいいというからだ。めんどくさいのは嫌らしい。

それなら手伝わなくてもいいのにと思ったけど私はそれを口にはしなかった。

「私が指示してあげるから大丈夫だよ」

「そっか」

春斗は納得すると取り出したばかりの本を元の場所にしまった。

「で、最初はどうするんだ？」

春斗は包丁を取り出しながらそう言った。

「野菜を切ってもらえる。ちなみにその包丁は使わないわよ」

春斗が取り出していたのはケーキ類を切ったりする包丁だった。切れないことはないだろうけど苦戦するのは目に見えている。

「え、そうなのか？ってか包丁って何でも一緒じゃないんだ？」

家庭科の時間に包丁の説明もあったのに何も聞いてないらしい。おそらく眠っていたのだろうけど。

「うん、違うよ。今回はこの包丁で切って」

私はそう言って包丁を取り出しそのまま春斗に渡す。

「了解。さっさと切ってやるよ」

それよりは正確に切ってほしいと思い私は苦笑する。春斗はそれに

気付かずじゃがいもを切るのに集中しているようだった。

「こんなんでいいか？」

私がお肉を切っていると春斗は私に自分が切ったじゃがいもを見せてくれた。

「結構、上手だね」

私は素直にそう言った。思ったよりもとても上手に切れていたのである。包丁の区別もつかない人と同一人物だとは到底思えない。

「そうか？」

私の言葉に春斗は少しだけ気分を良くしたようだった。

「うん、本当に上手だよ」

思えば春斗は昔からなんでも器用にこなしていた。スポーツにしろ芸術にしろ基本的に何でも上手だった。。勉強は出来なかったのだけど。

「じゃあ、続けて人参とかも切るよ」

「うん、ありがとう」

完全に期限を良くした春斗は鼻歌交じりで切り始めていた。その姿

がなんとなく可愛らしかった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ７：春斗&？？？入りカレー

「やっと、できた」

カレーを作り始めて１時間半。やっとの思いで俺の料理処女作となるカレーが完成した。俺がやったのは野菜を切ることだけなのだが。あとは瑞穂の変な味付けを防ぐこと。

「すぐご飯にする？」

隣に立っている瑞穂がそう聞いてきた。

「あぁ、ご飯にしようぜ」

普段に比べると少しだけ遅くなってるのでさすがにお腹が空いている。それに今日はタイムサービスと初料理で疲れているのだから食べないわけにはいかないだろう。

「分かった。じゃあ、すぐに準備するね」

「あぁ」

返事をしてから俺はなんか夫婦みたいだなと思った。そしてすぐに頭を振る。こんなんじゃ馬鹿竜馬と考えが一緒じゃないか。

瑞穂が皿にご飯とカレーを綺麗に入れていく。それを俺がテーブル

に運び準備は終わった。俺と瑞穂はそれぞれ席に座り手を合わせる。

「いただきます」

2人でそう言うと、お互い自分の目の前にあるカレーを食べ始める。

「・・・・・・・・・」

何だこの味？普通のカレーと違う気がするけど。なんというか甘い、とてつもなく。

目の前にいる瑞穂を見るととっても美味しそうに食べている。こいつ、まさか何か入れたんじゃないのか。でも、俺はずっと見張っていたわけだし、俺の気のせいかな。そう思い俺はもう1口食べてみることにする。

「パクッ」

甘い。カレーは確かに甘口を使ったけど、この甘さは尋常じゃない。

「瑞穂、お前さぁカレーになんか入れたか？」

「ジャム」

瑞穂はさらっとそう言った。

「ジャムを入れたのか？あの甘いやつ？」

「他に何があるの？」

「いや、ないよな」

ジャムを入れたのか。それなら甘いはずだよな。

「っていうか、何でいれたんだ？」

「美味しくなるからに決まってるでしょ」

「お前、こんな甘いのカレーじゃないだろ。甘すぎにもほどがあるぞ」

「そう？美味しくていいじゃない」

食べ物のことで瑞穂に文句を言うのが間違ってるのかもしれない。

「お前、いつの間にこれ入れたんだよ」

「え、普通にカレーのルーを溶かす時に入れたよ」

確かに見張ってたはずなのに。いとも簡単に入れられているとは。我ながら情けなさすぎる。

「はぁ・・・」

「どうしたの？溜息なんかついて」

「いや、自分が情けなくてさ」

「どういう意味？」

「いや、気にするなって。それより食べようぜ」

「うん」

瑞穂はそう返事すると美味しそうにジャム入りカレーを食べ始めた。そして俺もなるべく美味しく食して見えるように振舞いながらジャム入りカレーを食べた。

結局、俺は気分を悪くしながら自分の家へと帰ることになった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ８：春斗&お泊り

家につくと俺はすぐにトイレへ駆け込んだ。そして、３０分ほどトイレにこもったままはき続けた。口から出てくるものは茶色だったので下から出るべきものが上から出てる気がして更に吐き気を催した。

「ったくジャムなんか入れやがって」

吐き終わってそう言いながらトイレを出てくる。そのまま自分の部屋に入りベッドの上に倒れこむ。

「お風呂にも入る気しねぇ。明日、入ろうかな。でも気持ち悪いしな」

俺はそう呟きながら考えを巡らせる。そして、少し考えてから眠ろうと目を閉じると、まるでそれを遮るように携帯が鳴り出した。

「誰だよ、こんな時間に電話をかける馬鹿は」

そう言いながら携帯の画面を見ると、そこには瑞穂とあった。

「あの野郎、人をさんざん吐かせときながら今度は嫌がらせか？」

俺はぶつぶついいながら携帯に出る。

「もしもし、瑞穂どうしたんだ？」

俺は不機嫌を露にした声で電話に向かってそう言った。

「恐い・・・」

瑞穂から帰ってきたのはその言葉だけだった。

「はぁ、何が恐いんだよ？」

「だって家に私しかいないんだもん・・・」

「いやお前、仮にも高校生だろ？恐いはないだろ？」

「そんな事言っても恐い・・・」

「はぁ・・・。それで俺にどうしれっていうんだよ」

「泊まって・・・」

「はぁ。お前の家にか？」

「うん」

「我慢しろよ。1人で大丈夫だろ？」

「無理」

駄目だ。こりゃ諦めるしかないな。

「分かった。風呂入ってからそっちに行ってやるから、待っとけ」

「え・・・」

「どうしたんだ？」

「今すぐきてよ。お風呂は家の貸すから」

「・・・・・・・・」

呆れて何も言えない。高校生にまでなって1人が恐いと言うとは・・・

「分かった。すぐ行くよ」

「うん」

瑞穂の返事を聞いてから俺はすぐに電話を切り。着替えなどの準備をする。それらを5分で済ませ家を出て瑞穂の家へと向かう。我ながらこんなに急いで行動するなんて優しすぎだな。そんな馬鹿な考えをしながら俺は瑞穂の家へと向かった。

「ピンポーン」

瑞穂の家のインターホンを押す。5秒もかからない速さで瑞穂がドアを開け顔を出す。

「遅いよ、春斗」

少しだけ目に涙を浮かべながら瑞穂がそう言った。俺は早く来たつ

もりなんだけどな。

「悪かったよ。ってかお前泣いてたの？」

「違うわよ。少し眠くて欠伸してたの」

だったら寝とけよ。俺をこんな大変な目に合わせやがって。

「はぁ。とりあえず上がっていいか」

「うん」

俺は瑞穂の返事を聞いてから玄関に入りそのまま家にあがる。

「とりあえず、お風呂借りていいか？」

俺は家にあがってからそう聞いた。

「うん。タオルは準備しておいとくね」

「あぁ、よろしく」

俺はそう言ってから風呂場へと向かう。昔から慣れ親しんだ家だから風呂場とかの場所もばっちり頭に入っていて迷わずについた。

３０分ほどお風呂に入ってから上がるとリビングで瑞穂がテレビを見ていた。

「それ面白い？」

特に面白そうに見ているわけでもない瑞穂に対してそう聞いてみた。

「全然、暇だから見てるだけ」

「それならもう眠らないか？俺、とっても眠たいんだけど」

「うん」

「で、俺はどこで寝ればいいの？まさかリビングのソファ？」

「別にどこでもいいよ」

一番そういうのが困るんだよな。人の家でそう言われるのって。

「できれば指定してほしいんだけど？」

「・・・・・・」

俺が何か悪いことを言ったのか瑞穂は顔を赤くしている。一体どうしたんだろう。

「私の部屋で寝る？」

顔を赤くしたまま瑞穂は突然そう言った。

「はぁ？お前の部屋ベッド１つしかないじゃん」

「布団敷けば床に眠れるよ」

「いや、そりゃあそうだけどさ」

「じゃあいいじゃない」

何がいいのか俺には分からぬまま、瑞穂は1人納得しながら自分の部屋へと向かった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ９：瑞穂&久しぶり

何年ぶりになるのだろう。春斗と同じ部屋で一緒に寝るのは。小さい頃はよく一緒に眠っていた。それが歳を重ねるごとに減っていき今ではそんなことありえなくなった。

「久しぶりだね。一緒に眠るのって」

思ったことを口にしてみる。何を話していいのか分からないから。

「あぁ、小学校3年生の時ぐらいからお互い恥ずかしがってたしなぁ」

「だよねぇ。本当に小さい頃はそんな風になるなんて思ってもなかったのに」

「それは言えてる」

春斗の声は眠たそうだ。さっきから欠伸を何度も繰り返している。

「もう遅いし眠ろっか」

春斗を気遣いそう提案する。本当はもうちょっと話していたいけどさすがにそれは悪い気がする。

「うん」

欠伸を交えながら春斗はそう言った。少しだけそれが可笑しくて笑ってしまった。

「じゃあ、おやすみなさい」

「うん、おやすみ」

返事をしてから春斗はすぐに眠りについたらしく、規則的な寝息が隣から聞こえた。

「瑞穂、瑞穂起きろよ」

春斗が私の肩を揺すりながらそう言っている。私はゆっくりと体を起こして時計を見る。

「5時・・・？春斗、少し早くない」

私は普段6時に起きている。多分、春斗も普段はそれぐらいだと思うのだけど今日は早起きのようだ。

「忘れてのか？今日は香穂さんいないんだから自分達で弁当作らなきゃ」

香穂さんというのは私のお母さんだ。お母さんはおばさんと呼ばれるのが嫌らしく春斗に無理やりそう呼ばせているのだ。

「あ、そうか。完璧に忘れてた」

「お前、そういう所抜けてるよなぁ」

「今日はたまたまよ。たまたま」
「はいはい。とにかく急ごうぜ」
「分かった」
私はそう返事してから春斗に続き1階へと下りて行った。

「何作ろうか？」
台所で包丁を持ちながら春斗が私にそう尋ねてきた。
「う～ん。時間もないし簡単なのでいいんじゃない？」
「そうだな。それより包丁の使い道ってある？」
「まぁ少しはあると思うよ」
「良かった。俺、切ること以外できないからさ」
春斗は苦笑いを浮かべながらそう言った。それが可笑しくて私は少しだけ笑った。
「じゃあ、私が適当に作って、切るのは春斗に頼むね」
「あぁ、ありがとう。でも味付けは普通に頼むぜ」

「普通にって？」

私は気になって聞き返してみる。

「いや、だから瑞穂好みじゃなくて一般的な味付けにしてってこと」

「どうして？」

「今日はそういう気分なんだよ」

「分かったわよ」

私は渋々了解した。その返事を聞いてから春斗がほっとしたような顔になっていた。そんなに今日は一般的な味付けが良いのだろうか。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０：春斗＆２人の女子

通いなれた道を今日もまた瑞穂と歩いている。

学校の校門を通り校舎の方へと歩いていく。たまにこの時誰かの視線を感じる時がある。その方向を見るといつも男子が嫉妬を含めた目で俺を見ている。その度に瑞穂はもてるのだと再確認させられる。

校舎に入り自分達の教室に向かおうと階段を登ろうとした時、後ろから瑞穂の事を呼ぶ声が聞こえた。

「瑞穂」

その声に俺達は反応してほとんど同じタイミングで振り向いた。振り向いた先には１つ年上の３年生である女子の先輩がいた。

「真奈美」

瑞穂が嬉しそうな声でそう言った。

「瑞穂、１週間ぶりぐらい？あんたが留年を選んでからなかなか会えなくて寂しいのよ」

「私も真奈美と会えなくて寂しいよ。本当にごめんね」

「いいって。あんたの気持ちも分かってあげてるつもりだしね」

「私の気持ち？」

瑞穂と真奈美と呼ばれた先輩は俺を忘れたかのように楽しく会話している。先に教室に行ってもいいのだろうか。

「あんたもしかして気付いてないの？」

突然、真奈美先輩が驚いたような声をあげる。話を聞いてなかった俺はまったく何がなんなのか分からない。

「気付くって何を？」

「はぁ・・・」

真奈美先輩は本当に呆れたような溜息をついている。それをみて瑞穂は少しだけ困惑しているようだ。

「自分の気持ちに気付かないで留年を選んだわけね」

「よく分かんないよ」

一番分からないのは俺なんだけどね。

「まぁあんたらしいのかもね」

そう言って真奈美先輩は急に笑い始めた。何かいろいろと忙しそうだなこの人。

「とりあえず頑張ってね。それと私とこまめに連絡取ってよね」

「うん、分かった」

さっきまで困惑していた顔は嘘のように瑞穂は笑顔でそう言った。

「じゃあ私は教室に行くね」

「うん」

「じゃあね瑞穂。それと瑞穂の幼馴染君」

「あ、はい」

俺は突然、呼ばれたために少しだけ焦ってしまった。

「なんか明るい人だな」

俺は真奈美先輩が見えなくなってから瑞穂にそう言った。

「うん。それに面白いよ」

笑顔でそう言う瑞穂に俺はそうかもねと言いながら頷いた。

教室に入ると既にクラスメイトの半数以上は登校していた。その中に竜馬の姿もあったので少しだけ溜息をつく。

俺は自分の席に向かい鞄を置き椅子に座る。まるで見計らったかのように竜馬が近付いてきて口を開いた。

「今日もラブラブだな」

またかよ。竜馬に瑞穂と登校するのを見られた日はいつも最初にこの台詞を聞く。俺はそれが鬱陶しく感じられ最近は早く登校していたが今日は弁当を作ったり、真奈美先輩に捕まったりといろいろ時間をロスしたからこうなってしまった。

「毎回、毎回うるさいんだよ」

「だって春斗だけ幸せになろうなんてインチキなんだよ」

「別に幸せじゃねえよ」

「毎日、彼女と登校して幸せじゃないはずがないだろ」

「お前はそこから間違ってるんだよ。俺と瑞穂は付き合ってない。何でも言ってるだろ」

「でも、他人から見たらカップルでしかないんだぜ。付き合ってるも同じだろ」

「それは幼馴染だからだ。それにそう見えるからってカップルってのはおかしいだろ」

「まぁ、それは人の捉え方次第ってやつさ」

「あっそ。とにかく俺と瑞穂は違うから」

「まぁ、そういうのも悪くないんじゃないか」

ぶん殴りたい。今すぐにこいつに制裁を下したい。でも、ここは教

室だ。我慢を忘れるな。

「どうした？いきなり考えた顔になって」

本当の事を言えるはずない俺は適当にごまかしておいた。その返事を聞いてから竜馬は少しだけ笑ったかと思うと自分の席へ戻っていった。

「キーンコーンカーンコーン」

０時限目の始まりを告げる鐘が鳴り響く。時間はまだ7時４０分。さすがに進学校なだけはあると毎度思ってしまう。そして自分が入学できたことに驚いてしまう。中学校の時も今と変わらず馬鹿だったのに。

鐘が鳴ってから2，3分した頃に先生が入ってきた。今は英語の時間で教科担任は美人で男子からの人気が高い堀内　梓先生だ。そのため、男子生徒のやる気が高く教室は騒がしい。毎度の事だけど俺が眠りたい時も煩くて寝れはしない。

「では出席をとりますね」

美人に似合うような透き通った声で先生が出席をとる。返事をする男子の声が気持ち悪く感じるのは俺だけなのか。もしかしたら俺もこんな声をしているのかと考えると嫌になる。

「では授業を始めますね」

先生のその言葉を合図に俺を除いたほとんどの男子が情けない声で返事をしていた。女子の中では数人笑ってる奴がいる。俺を同じ目で見てないように心の中で祈ることにする。

「キーンコーンカーンコーン」

始まりの鐘が鳴ってから６０分後、授業の終わりを告げる鐘が鳴り響く。それにしても６０分授業とは長すぎる。中学校に比べて１０分も伸びている。１年と少し経った今も慣れはしない。

「春斗」

俺が物思いに耽っていると後ろから誰かが俺を呼んだ。俺を声が聞こえた方向に向くとそこにはクラスメイトではない女子生徒が立っていた。

「どうしたんだ、琴奈？」

彼女の名前は東　琴奈。俺と同じ中学校出身で同学年。中学校の時から俺や竜馬と仲がよく、たまにクラスに寄ったときに喋りかけてくる。

「教科書貸してほしくてさ。他の友達も持ってなくて」

「別にいいけど。教科は何？」

「えっと生物」

「生物ね」

俺はそう言いながら立ち上がり自分のロッカーへと向かう。ローカーから生物の教科書を取り出し琴奈に渡す。

「ありがとう、助かったよ」

琴奈はお礼を言うとあっという間に教室を出て行った。なんかあいつもいろいろと忙しそうな人間だなと思う。

そんな事を考えながら俺は自分の席へと戻った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１：瑞穂＆藤堂　信幸

今日の朝、久しぶりに真奈美に会った。同い年で一緒に1年間の留学をした。そんな私達2人が滅多に会えなくなったのは私が留年の方を選んだから。逆に真奈美は進級を選び元々の学年で生活を送っている。自分の選択に間違いはないと思っているけど時々こっちを選んだことに後悔する時がある。それでも完全に後悔していないのだから私はこっちでも満足しているのだと思う。その理由がどうしてなのかはよく分からないのだけど。

今は0時間目の英語の時間だ。やけに男子達の声が明るいのが気になってしまう。やっぱり先生が美人だからなのだろうか。そんな中、春斗はいつも通りなのに少しだけ嬉しくなってしまった。でも、何故だろう。

今やってるのは仮定法という範囲だ。1年間の留学を経験してる私はさすがに英語は得意だ。やっぱり理解できる授業は楽しく私は英語の時間が一番好きだ。それに比べて春斗は辛そうな顔をしている。

「ここは時制が過去になってるから・・・」

そういった説明が綺麗な声でされている。男子のほとんどは黒板を熱心に見つめている。正確に言えば先生を。

授業の終了を告げる鐘が鳴り響く。やっぱり英語の時間は早いなと改めて感じる。春斗の方を見るとやっと終わったよみたいな顔をしている。少しだけ笑ってしまう。

私が春斗を見て笑っているとたまに見る女子生徒が春斗の方へと近づいていくのが見えた。確か名前は東　琴奈さん。春斗に聞いたときそう言っていたのを思い出す。

春斗と東さんは楽しそうに話しているように見える。内容は分からないけどなんとなく嫌な気分になった。心の中が少しもやもやしている

私がそんな事を思っていると突然、春斗は立ち上がり自分のロッカーへと向かい生物の教科書を取り出し東さんへと渡していた。東さんをそれを受け取るとお礼を言って教室を出て行った。それを見届けてから春斗は自分の席へと戻っていった。

「瑞穂」

突然、後ろから私の名前を呼ぶ声が聞こえた。声の聞こえた方を振り向くとそこには風歌が立っていた。

「風歌、どうかしたの？」

「別になにもないよ。ただ瑞穂が旦那様の事ばかり見てるからさ」

「べ、別に私は春斗の事ばかり見てないわよ。それに春斗はそんなんじゃないから」

少しだけ焦って噛んでしまう。これじゃ怪しすぎる。

「どうかしらね。旦那様が他の女子と話しているのが気になるんでしょ？」

「別にそんなんじゃないわよ」

「本当に？瑞穂の視線はずっと旦那様の方を向いてたわよ」

「違うわよ。私はすこしボーっとしてただけ」

「ふ～ん。ボーっとする時でも愛しい旦那様の方を向くんだね」

「それはたまたま。もう、風歌いい加減にしてよ」

「ふふふ、分かったわよ。ちょっといじめ過ぎちゃったかな」

意味ありげな笑いを浮かべながら風歌はそう言った。

「キーンコーンカーンコーン」

午前中最後の授業の終わりを告げる鐘が鳴り響いている。これから弁当だという事もあってクラスはざわついている。

「瑞穂、弁当食べようぜ」

春斗がそう言いながら私の席へと近付いてくる。その手には２つの

弁当箱がある。勿論、私と春斗の分だ。

「はい、瑞穂の弁当」

春斗はそう言いながら私に弁当を渡してくれた。私はお礼を言いながらそれを受け取る。

「今日はちゃんとした物を食えるぞ」

突然、春斗がそんな事を言った。どういう意味だろう？

「ちゃんとした物って？」

私はそう聞いてみる。

「あ、いや。何でもないよ」

「そう？」

「うん」

これ以上、聞いても無駄だろうし私は簡単に引き下がる。長い間、一緒にいるとこういう事が分かってしまう。

「いただきます」

私が春斗は二人揃ってそう言った。弁当箱を開けるといつもより質素だけど美味しそうなおかずが入っている。そういえば春斗と一緒に作ったんだと思い出す。

「なぁ瑞穂」

私が弁当を食べようとすると春斗が私の事を呼んだ。食べるのをストップし春斗の方を見る。

「真奈美先輩がいるよ」

そう言いながら教室の入り口の方を指差した。私がその方向を振り向くと確かに真奈美が立っていた。

「真奈美、どうしたの？」

私は立ち上がり真奈美の元へ駆け寄りそう言った。

「久しぶりに瑞穂と弁当食べようと思ってね」

そう言いながら手に持っている弁当箱をひょいと持ち上げる。

「いいね。春斗も一緒だけど大丈夫？」

「全然大丈夫。一度話してみたかったし。それに私も1人じゃないんだよね」

そう言って真奈美は顔を右の方に向ける。私もその方向へと顔を向ける。そこには1人の男子生徒が立っていた。

「藤堂君？」

私はその男子生徒にそう尋ねた。

「あぁ、朝日久しぶりだな」

藤堂君はそう言いながら手を上げた。

藤堂　信幸君は私と同い年の生徒だ。中学から学校が一緒で男子の中では仲が良いほうだった。私が留学に行ってからはこれが初めてだった。

「本当に久しぶりだね」

「あぁ、朝日が留学に行ってから会ってないからな。1年と2ヶ月ぐらいか。まぁ本当は校門の方とかで見かけたりしたんだけどなかなか声かけづらくてな」

「私も何度か見かけたことあるよ。藤堂君と同じで声をかけられなかったんだよね」

「へぇ。俺はもしかしたら忘れられてるんじゃないかと思ってたけど少し安心した」

「簡単に忘れたりなんかしないよ」

「そうだよな」

藤堂君はそう言うと小さく笑った。私もそれを見て笑った。

「感動の再開は終わった？それより弁当食べましょう。時間もないからさ」

私と藤堂君の間に割り込んで真奈美がそう言った。

「そうだな。それにお腹もすいた」

「じゃあ食べよっか」

私のその言葉を合図に私達は教室に中に入った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２：春斗&痛み

俺が弁当を食べていると瑞穂が真奈美先輩と知らない男子生徒を連れてきた。制服から判断して１つ上の３年生のようだ。

「春斗、友達も一緒に食べるけどいいよね？」

瑞穂が俺にそんな事を聞いてきた。

「勿論、いいけど。それより俺がいない方がいいんじゃない？邪魔だろうし」

俺がそんな事を言うと突然、瑞穂の横から真奈美先輩が顔を出し口を開いた。

「春斗君もいなよ。いろいろと話してみたいし」

「はぁ、じゃあそうします」

春斗君なんて初めて呼ばれたけど。

「うんうん」

真奈美先輩はそう言いながら近くの開いてる席に座った。その隣の席に名前の分からない先輩が腰を下ろした。

「あ、春斗。こちらは藤堂　信幸君。私の友達なんだ」

突然、瑞穂がそう言った。へぇ藤堂先輩って言うんだ。

「えっと俺は秋月　春斗です。よろしくお願いします」

俺はたった今名前を覚えた人に挨拶をする。

「こちらこそよろしくね。秋月君」

藤堂先輩は笑顔でそう言ってくれた。なんか優しそうな人だと思う。

「真奈美の事は分かるよね、春斗？」

俺と藤堂さんの挨拶が終わってから瑞穂がそう言った。

「うん、何度か顔は合わせてるから。よろしくお願いしますね。真奈美先輩」

「こちらこそよろしくねぇ」

真奈美先輩は笑顔でそう言った。

やっぱり俺いなくてもよかったんじゃ・・・。今、俺を除く3人はとっても盛り上がっている。どうして俺がそうでないかというと話についていけないからだ。3人が話しているのは主に高校1年の頃の話。俺はまだ中学生だったのだから仕方ない。

「あの時は楽しかったなぁ」

「うんうん。特に瑞穂が面白かったよねぇ」
「もう思い出させないでよ」
そういった会話を3人は繰り広げている。箸を持った手は全員止まっている。俺は動いているのだけど。
「それより、春斗君。君は知ってるの？」
真奈美先輩が突然、俺に話を振ってきた。
「え、何をですか？」
あまりにも突然のことなので何の事か俺には全く分からない。
「瑞穂がどうして留年を選んだかって事についてに決まってるでしょ」
へぇ。それって決まってるんだ。良く分かんないけど。
「いいえ、知りませんけど・・・」
「本当に？」
「えぇ、瑞穂から聞いたこともないですし」
「ふ～ん。じゃあ心当たりとかは？」
「ないですけど」

「そう」

真奈美先輩はどうやら納得してくれたようだ、一体何を聞きたかったのだろう。

「真奈美、そろそろ戻らないと」

瑞穂が真奈美先輩に向かってそう言った。時計を見るとそろそろ予鈴がなる頃だ。

「あ、本当だ。じゃあ行こうか、藤堂君」

「あぁ、じゃあな朝日」

「うん、またね」

瑞穂の返事を聞き2人は教室から出て行った。明日も来るのだろうか。もし、そうなら俺は違う所で食べようと思った。

午後の授業も全て終わり、今はＨＲの時間で担任の杉浦　美里先生が連絡事項を皆に告げている。多くの男子生徒がまだかよという顔をしている。そんなに焦らなくてもいいのに。

「じゃあ連絡はこれで終わります。では帰りの挨拶お願いします」

先生がそう言ってから、週番の人に従って挨拶をすます。これで俺達は晴れて自由の身となった。

「瑞穂、準備できた？」

俺は予め準備していておいた鞄を持ち上げ瑞穂の席へと近づいてそう言った。

「ごめん、もう少し待って」

真面目な瑞穂は俺と同じように鞄を空にして帰るのが出来ないらしくいつもなんらかの教材を持ち帰る。偉い幼馴染だなと感心してしまう。

「別にゆっくりでいいよ。どうせ急いでないし」

「うん、ありがとう」

瑞穂はそう言った途端、動きがスローになった。時々、思うけど瑞穂って単純すぎ。

「終わったし帰ろうか」

スローになり始めて約5分後に瑞穂はそう言った。さすがに時間かかりすぎ。全然構わないのだけど。

「あぁ、行こうぜ」

俺がそう言ってから俺達は歩き出した。そしてそのまま入り口のドアを出ようとした時、思いがけない自分がそこに現れた。

「あれって藤堂先輩じゃない」

前から歩いてくる人を少しだけ指差して俺は瑞穂にそう言った。瑞穂はその方向を見て、

「あ、本当だ」

と、言った。どうやら当たっているようだ。

「あ、朝日」

藤堂先輩も俺達に気付いたらしく小走りに変えてから近付いてきた。どうやら瑞穂に用事があるらしい。

「どうかしたの藤堂君？」

瑞穂が藤堂先輩がすぐそこまでやってきてからそう尋ねた。

「うん、ちょっと朝日に用があってさ」

「何？」

「えっと、今って暇？良かったら一緒に帰らない？」

「え・・・」

藤堂先輩の突然の誘いに瑞穂は少し困惑しているようだ。

「いや、その嫌ならいいんだ」

瑞穂の顔を見て少し寂しげな顔になった藤堂先輩がそう言った。

「嫌じゃないよ。ただ突然でびっくりしただけ。でも、どうしよう？」

そう言ってから瑞穂は俺のほうを見た。俺を1人で帰すのを気にしているのだろうか。

「俺の事は気にしないでいいよ。1人で帰るからさ」

「そう？じゃあ藤堂君、別に大丈夫だよ」

「本当？ありがとう」

藤堂先輩は本当に嬉しそうな笑顔でそう言った。さっきから薄々感じてたけどこの人は瑞穂の事が好きに違いない。そう考えると俺の心は少しだけ痛くなった気がした。

「うん。じゃあ行こうか」

瑞穂がそう言ってから2人は歩き出した。俺は10分ほど教室で待ってから帰ることにした。

なんだか心の奥が痛むけどどうしてだろう・・・

Ｅｐｉｓｏｄｅ１３：瑞穂&春斗への

留学から帰ってきて、春斗以外の人と初めて一緒に帰ることになった。隣にはいつも春斗がいるものだからついつい藤堂君の事を春斗と呼んでしまいそうになる。

「こうやって朝日と一緒に帰るのって久しぶりだなぁ」

「うん、そうだね。１年生の時は真奈美と一緒に帰ったりしたのにねぇ」

「そうだよなぁ」

藤堂君が遠くを見つめて何かを考えているような顔になる。少しだけ見とれていた自分に気付いた。

「なぁ秋月」

考え事をしていたと思ったら突然、藤堂君はこっちを見ながらそう言った。

「何？」

「どうして、留年を選んだんだ？」

「え、どうしてって？」

「そのままだよ。俺にはお前が留年を選んだ事が全然理解できない」

「そう？」

「だって朝日は頭だっていいんだから。それに進級を選んだ方が友達も多いだろ」

「それはそうだけどね。自分でも分からないんだ」

「え？」

「自分でも分からないの。どうして留年を選んだのか」

「後悔はしてないのか？」

「うん、それは自信を持って言えるよ」

「そう・・・か」

藤堂君はまた考えるような顔になった。

「もう1つ聞いていいか？」

藤堂君の顔はさっきより真剣になっていた。

「何？」

「幼馴染の秋月君だっけ？」

「あぁ、春斗の事」

「うん。どう思ってるんだ？」

「え・・・」

春斗の事をどう思ってる。そんな事考えたこともなかった。隣にいて当たり前だと思ってた。私が春斗の隣にいて春斗が私の隣にいる事。それがずっと当たり前だと思っていた。

「良く分かんない。考えた事ないから」

「そう・・・。変な事聞いてごめん」

「別にいいよ」

私達は無言で歩いた。必死に話題を探そうとしたけど違う考えがそれを邪魔した。私は春斗の事をどう思ってるのだろう。大切な幼馴染。それは分かってる。それよりももっと大切なものなのだろうか。

「じゃあ、俺はここだから」

私が考え事をしていると藤堂君がそう言った。

「うん。また明日ね」

私はそういいながら手を振った。

「あぁ。またな」

彼も手を振りながらそう言った。

家についてから春斗にメールを送ることにした。

「今日は私が1人で料理を準備するからお家で休んでからきてもいいよ」

私はメールにそう打ち込んで送信ボタンを押した。そして、晩御飯を作り始めることにした。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１４：春斗&喫茶店

家についてもおかしくない時間帯に俺はなぜか喫茶店にいる。勿論、１人ではない。なぜか真奈美先輩と一緒だった。

少しだけ時間を遡ってみると・・・

瑞穂と藤堂先輩が行ってから少し待ってから俺は帰ることにしていた。ある程度時間が経ってから俺が帰ろうとすると教室に真奈美先輩が現れた。

「あれ、真奈美先輩どうしたんですか？瑞穂なら帰りましたけど」

真奈美先輩がここに来る理由はそれぐらいしかないと思い、俺はそう言った。

「今回は瑞穂に用があるんじゃないんだ」

真奈美先輩はそう言った。じゃあ一体どんな用があるのだろう。

「今回はね春斗君に用事があるのよ」

「俺に？」

俺は素直に驚きながらそう言った。まさか自分に用があるとは思ってもみなかった。

「えっと、何ですか？」

「ここで話すのもなんだしさ。喫茶店行かない？」

「はぁ。構いませんけど」

こうやって俺と真奈美先輩は喫茶店へ行くことになった。

それで、俺は今喫茶店にいるわけだけど・・・。

「あの、真奈美先輩」

真奈美先輩はストローを咥えたままこっちを向いた。

「用事って何ですか？」

「あぁ、聞きたい？」

聞かせたいから誘ったんじゃないの。

「ここまで来たんだし聞きたいです」

「それもそうだよね」

そう言って真奈美先輩は顔に笑みを浮かべた。掴み所のない先輩だなと思ってしまう。

「話はね瑞穂のことなんだけどね」

「瑞穂のことですか？」

「うん。単刀直入に聞くけど春斗君は瑞穂の事をどう思ってるの？」

「瑞穂の事ですか？別に幼馴染だと思ってますけど」

「はぁ。瑞穂も可哀想に・・・」

一体何が言いたいのだろう。どうして瑞穂が可哀想なのだろう。

「春斗君も気付いてると思うけどさ、藤堂君って瑞穂のこと好きなんだよ」

いきなり話が変わったなと思いながら頷く。それはさっきなんとなく感じたことだった。

「それは何となくさっき感じました」

「いいの？」

「え？何がですか？」

「だから・・・。瑞穂が藤堂君にとられてもいいの？」

「とられてもって。俺は別に瑞穂の事を好きという訳では」

「そう・・・。なら、しょうがないか」

それから真奈美先輩は1度もその話題には触れなかった。何気ない事を俺に聞く先輩はいつも通りの彼女だった気がする。

真奈美先輩と喫茶店を出たときには既に日が暮れていた。

「話しすぎちゃったわね」

「そうですね」

「じゃあ私はこっちだから行くね」

そう言って真奈美先輩は俺が帰る方向と逆に歩いていった。

「さようなら」

俺がそう言うと、笑顔で挨拶を返してくれた。

俺は真奈美先輩が見えなくなってから歩き出した。歩き出してすぐにポケットから携帯を取り出す。画面を見ると瑞穂からのメールが1件届いていた。俺がそれを開くとそこには

「今日は私が1人で料理を準備するからお家で休んでからきてもいいよ」

とあった。俺は一瞬にして青ざめた。メールが届いた時間を確認すると40分前になっていた。俺はさらに青ざめる。

「やばい・・・。またあれを食わされるのか・・・」

俺はそう呟いてから家までの道のりを全力疾走で駆け抜けた。

「ピンポーン」

瑞穂の家のインターホンを押す。既に体には限界がきている。こんなんなら運動部に入っておくべきだったなと思ってしまう。

「は～い」

瑞穂の高く綺麗な声が聞こえてからドアが開いた。瑞穂を見るとエプロンをつけている。

「遅くなって悪かったな。友達に捕まっちゃってさ」

「家に帰ってからでいいってメールしたけど」

「そうだけど、1人で準備させるのは悪いと思って急いで帰って来たんだ」

「そうなの？でも、もうできたよ」

「・・・・・・・」

「どうかしたの春斗？」

「いや・・・なんでもないよ・・・」

今日は一体何を入れたのだろう。そんな不安が俺の胸を支配した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１５：春斗&悩み

俺は今、瑞穂の家のトイレに篭っている。理由を述べるならばお腹を壊しているからだ。勿論、瑞穂の料理でだ。

それにしても、どうあったらあんな物を作れるのだろうか。思い出すのも嫌になるぐらい大変な料理だった。ジャム入りカレーなんて可愛いものに感じてしまう。勿論、瑞穂はそれを美味しそうに食べていたのだけど。

トイレから出るとリビングで瑞穂がテレビを見ていた。企画物の内容らしく瑞穂を見ていると結構面白そうに見ている。

「瑞穂、俺もう帰るから」

瑞穂の背中に向かってそう言い、俺は玄関の方へと向かう。玄関まで辿り着いた時、瑞穂がすごいスピードでこっちへ走ってきた。

「どうしたんだよ？そんなに全力で走って」

「今日も誰もいないんだけど」

俺は一瞬何の事だか分からなかった。でも、すぐに瑞穂の言ってることを理解した。

「まさか今日も泊まれとか言うんじゃないよな」

「言う」

馬路かよ・・・。

「お前、いくらなんでもそれはないだろ・・・」

「怖いものはしょうがないでしょ」

「はぁ・・・」

俺は溜息をつく。今日も結局泊まることになってしまったからだ。

「自分のベッドが一番眠りやすいのに」

「お母さんが帰ってきたらまた眠れるよ」

「そうだね」

俺はもう1度溜息をついて瑞乃さん早く帰ってきてくださいと心の中で願った。

時間は12時。隣のベッドの上では瑞穂が静かな寝息をたてながら眠っている。俺は何故か寝付けないでいた。真奈美先輩の言ったことを考えていたのだ。

「瑞穂が藤堂君にとられてもいいの？」

真奈美先輩がそう言った時、何を考えていいのか分からなかった。多分、それは俺が瑞穂が側からいなくなることを考えたことがなかったからだと思う。だから、とられてもいいのっていう言葉を理解できなかったのだと思う。

「俺は・・・どう思ってるんだろう」

大切な幼馴染。それは分かりきっている。でも、それ以上なのか、それだけなのかと聞かれると全然分からない。でも、これだけは言える。瑞穂をとられるのは嫌だ。好きだとかそんなんじゃなくて、日常が壊れて俺が俺でなくなってしまう気がするから。

「これって依存なのかな？」

俺はそう呟いた。勿論、誰も聞いている人はいない。だから答えてくれる人もいない。まぁ答えてくれる人を望んでいるわけではないからいいんだけど。だって自分でこの答えは出さないといけないのだろうから。

俺はそこまで考えて思考をストップした。もう寝ようと思った。今はこのままでいいと呟いてから俺は眠りについた。

次の朝、学校に瑞穂と向かっていると藤堂先輩と遭遇した。正確に言うならば俺たちを見つけた藤堂先輩がこっちに向かってきたと言うべきだろう。

「おはよう、朝日。秋月君」

「おはよう藤堂君」

「おはようございます藤堂先輩」

それぞれ挨拶を交わすと俺達は3人で歩き出した。学校までの道のりまで俺は口を開かなかった。というよりは、藤堂先輩が瑞穂に話し続け瑞穂はそれの相手をして2人そろって俺を忘れているようだった。何故だか分からないけど少しイライラした。

教室につくと竜馬がこっちへ寄ってきた。

「どうしたんだ、お前機嫌悪そうだぞ？」

以外に鋭いなと思いながら俺はなんでもないよと言った。

「まぁ、お前の事だから寝不足かなんかだろ。それとも夫婦喧嘩か？」

また始まったよと思いながらも、俺はいつもの様に相手をしてあげる気がしなかった。

「別に・・・」

「やっぱり、なんかお前おかしいぞ。熱でもあるんじゃないか」

竜馬は本当に心配しているような声になってそう言った。

「いや大丈夫だよ。ちょっとだけ気分が悪いだけ」

「そうか。なら今日はからかうのは止めとく。お前の突っ込みがないとやる意味ないし」

「あぁ」

「まぁ元気出せよな」

俺はお礼を言って瑞穂の方を見た。普段と変わらない瑞穂がそこにはいた。ただ、俺はいつもより瑞穂との距離を感じていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１６：瑞穂&決心

今日はなんとなく春斗の様子がおかしい気がする。ボーっとしていてなんか元気がない。一体どうしたのだろう。考えてみても何も思い当たることがない。こんなに時間を共有しているのに私は全然、春斗の事を分かっていないんだなと思う。それと同時に少し悲しくなる。

「瑞穂、どうしたの？」

私が考え事をしていると風歌が私のところへやってきていたようだった。

「ううん、何でもない」

「何でもないはずがないでしょ。今、旦那様の方に視線が向いてたよ」

風歌はそう言って悪戯っぽい笑みを作る。

「別にそんなんじゃないよ。ただ春斗、元気ないなと思って」

「ふ～ん。確かに元気なさそうね。喧嘩でもしちゃった」

「してないよ」

「じゃあどうしたんだろうね？」

私にそんな事を言われても分かんない。私はそう思いながら俯いた。

「聞いてみたら？」

突然、風歌がそんな事を提案した。

「え？」

「気になるんでしょ？だったら聞いてみなよ」

「でも・・・。何て聞いたらいいのか分かんないから」

「今日、元気ないけどどうしたのって言うだけでしょ」

「そうだけど」

「気になるのならしといた方がいいよ。いつか後悔しちゃうよ。それに壬柳君って女子に結構人気あるんだから取られちゃうわよ」

風歌は私が春斗の事を好きだと思っているらしい。私は自分の気持ちは正直にいうと良くわかっていない。でも、藤堂君も昨日、春斗の事をどう思っているのか聞いてきた。もしかしたら私は春斗が好きなのかもしれない。ただ近くにいすぎて気付けなかっただけ。だから皆には気付かれていたのかもしれない。

「うん。聞いてみる」

「それがいいよ。大丈夫だから、きっと上手くいく」

「ありがとう風歌」

「いいよ。私たち友達でしょ」

少し照れた顔をしながら風歌はそう言った。私も笑顔で頷いた。

結局、放課後になっても春斗の調子は変わらなかった。ボーっとしたり考え事をしていたり。そして私も春斗につられるように今日はそうやって過ごした。

「春斗、帰ろう」

私はいつもより早く帰りの準備をし、まだ準備をしている春斗に声をかけた。

「あぁ、もう少し待って」

春斗は少し驚きをこめた声でそう言った。私が早く準備終わってるのが不思議なのかなと思ってしまう。

「よし終わった。悪かったな待たせて」

「いいよ。いつもは私が待たせちゃってるし」

「それもそうだな」

そう言って春斗は少し笑った。それはいつもの彼の笑い方じゃなかった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１７：春斗&想いに気付く

瑞穂との帰り道。瑞穂の顔はいつもよりどこか険しい。何かを考えたり悩んだりしているようだ。何があったのだろう。

「ねぇ春斗」

ゆっくりとした口調で瑞穂がそう言った。

「何？」

「聞きたいことがあるんだけどさ」

「うん」

「今日はどうして元気がなかったの？なにか悩みでもあった？」

「え？」

まさか瑞穂に気付かれてるとは思わなかった。でも考えてみれば確かにあんだけボーっとしていたらばれるものだなと思う。

「気付いてたんだ」

「うん、気付くよ。だってずっと春斗の側にいたんだよ」

「それも、そうだよな」

俺達は今まで包まれたことのないような空気に包まれた。

「ねぇ春斗。何があったのか話してよ」

「でも・・・」

瑞穂のことで悩んでたんだ。本人には言いづらいに決まってる。

「私じゃ春斗の力にはなってあげられないの？」

そう言ってから瑞穂を涙を流した。俺はあまりの突然の事に驚いてしまった。

「瑞穂、大丈夫？」

「ごめん。急に泣いちゃって。自分でもどうしてか分からないの」

俺は目の前にいる瑞穂がまったく違う人に見えた。と言うよりは瑞穂に対して今まで感じたことのない気持ちを感じたという方が正しいかもしれない。

俺は瑞穂の事を守ってあげたいと思った。もう悲しんだりしないように側で守り続けたいと思った。そしてこの瞬間に分かった。

俺は瑞穂の事が・・・。

「瑞穂、もう大丈夫？」

「うん。本当にごめんね」

瑞穂は本当に申し訳なさそうに言った。そんな顔しないでほしい。胸が痛くなる。

「気にするなよ。それよりさっきの事、まだ聞きたい？」

「え？いいの？」

「うん。瑞穂には聞いてもらいたい」

「じゃあ聞く」

瑞穂はそう言って真面目な顔になった。正確に言うとさらに顔を引き締めたというべきだろう。

「その前に1つ聞きたいことがあるんだ」

「何？」

「瑞穂って今、好きな人いる？」

Ｅｐｉｓｏｄｅ１８：瑞穂&想いに気付く

「瑞穂って今、好きな人いる？」

春斗は間違いなくそう言った。私の頭は何も考えられない状態になった。顔が赤くなっているのが自分でも分かる。それぐらいに体全体が熱い。

「私？」

分かっていながらそう聞いてしまう。少しでも時間を稼ぎたいから。

「うん。いるの？」

答えは決まっている。今気付いたのだから。自分の本当の気持ち。春斗への想い。

「いる・・・かな」

「そう」

春斗が少し悲しそうな顔になる。

「今日は、ずっと瑞穂のことを考えてたんだ」

春斗が突然話を切り替えそう言った。いや、戻したというのが正しいのかもしれない。

「私のことを？どうして？」

「昨日、真奈美先輩に言われたんだ。瑞穂の事をどう思っているか」

凄い偶然だと思う。私も昨日、藤堂君に同じ事を聞かれたのだから。

「その時は答えられなかった。瑞穂のことを大切な幼馴染だとしか考えたことがなかったから」

私はそれを聞いて悲しくなる。私がどんなに春斗の事を思っても春斗が思ってくれくちゃ意味がないのだから。

「その後、いろいろ考えたんだ。俺がどう思ってるかを。俺の本当の気持ちを。でも考えれば考えるほど分からなくなっていったんだ」

その気持ちは私も理解できる。私もついさっきまでそうだったのだから。

「そして今日もそれで悩んでたんだ。これが今日ボーっとしていた理由なんだ」

「そう・・・なんだ」

結局、春斗は私への想いをどう捉えたのだろう。まだ考えてる途中なのかもしれない。どちらにしても怖くてそんな事聞く事はできない。

「そして、ここからが大切なんだけど」

「え？」

私は驚いた声でそう言った。もう話は終わりだと思っていた。一体、春斗はこれ以上何を話すのだろう。どれだけ考えても私には分かりそうになかった。

「俺さ、たった今気付いたんだ・・・」

「え？何に・・・？」

「自分の気持ち。昨日からずっと考えていた俺の本当の気持ち」

私は何も言えなかった。緊張が私の体を支配した。この先の言葉を聞きたいけど聞きたくないという思いに駆られる。喉が渇ききって苦しくなっていく。

「俺、瑞穂のことが好きだ」

私の中で世界が止まった気がした。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１９：春斗＆瑞穂～想いの果てに～

「俺、瑞穂のことが好きだ」

とうとう伝えた。俺の瑞穂に対する素直な想い。たった今気付いたばかりだけど、俺はきっと瑞穂にずっと恋をしていた。ずっとずっと小さな頃から。

「えっと、その・・・」

瑞穂は突然の告白で頭が混乱しているようだ。今まで幼馴染と思ってた男に告白されたらそうなるのかもしれないなと思った。

「瑞穂、落ち着いて」

そう言いながら俺は自分自身に驚いていた。どうしてこんなに冷静で居られるのか不思議でしょうがないのだ。

「春斗・・・あのね」

瑞穂がゆっくり口を開く。できればこの先の言葉は聞きたくない。だって瑞穂はさっき好きな人がいると曖昧ながらも肯定していた。それなら俺が振られるのは目に見えている。今更になって俺は告白した事を後悔していた。幼馴染としての関係も壊れてしまうのではないかと怖くなったのだ。

「私もね・・・春斗のこと好きだよ」

今何といったのだろう。聞き間違いでなければ好きだと言ってくれた。瑞穂が俺を。

「本当に？」

俺は震えた声でそう尋ねた。

「うん。小さい時からずっと春斗の事が好きだった。それに気付いたはの私もついさっきだったんだけどね」

瑞穂の顔を見ると赤くなっていた。俺にはそれがとても愛しく思えた。

「嬉しいよ。両想いだったなんて」

「私もよ」

瑞穂はそう言って笑った。照れくささが混じった可愛らしい笑顔だった。

「じゃあ帰ろうか」

俺は何を言っていいか分からずそう提案した。瑞穂といて緊張する日がくるなんて思ってもいなかった。

「うん」

瑞穂はそう言ってから俺の手を握ってきた。それは小さくて暖かい手だった。

「なんか恥ずかしいな」

「でも、私たち恋人同士でしょ」

「それはそうだけど」

「ならいいじゃない」

「そうだな」

俺達は手を繋ぎながら歩き出した。家までの道のりは何故かいつもより少しだけ遠く感じた。

それは多分、俺たちがお互いにいつまでも手を握っていたいと思いゆっくり歩いたからなのかもしれない。

Ｌａｓｔ　Ｅｐｉｓｏｄｅ：春斗＆瑞穂～幸せなエピローグ～

あれから６年が経ち私も今年２４歳、春斗の方も２３歳になる。

私は今、英語の先生として働き春斗は一流企業の社員となっていた。

春斗の就職先には誰もが驚いていた。勿論、ずっと側にいた私でも。確かに春斗はあの日から気持ちを入れ替え多くのことを頑張っていた。１度理由を聞いてみると、

「だって怠けてたら瑞穂を幸せにできないだろ」

春斗は真面目な顔でそう言った。私は今でも赤面したのをはっきりと覚えている。

交際の方はとっても順調だった。最初の方はいろいろ困ったりしたのだったけど。

私は特に風歌に悩まされた。本当の旦那さんになっちゃったのねと言われたりしてからかわれた。恥ずかしかったけど私は嬉しく感じていた。

ちなみに私は春斗との結婚ももう考えている。春斗がどう思ってるのかは分からないけどきっと彼も視野に入れてくれていると思う。

そういえば最近、１つだけ困った事がある。それは両親の事だった。私は今は家を出て春斗と同棲生活をしている。時々、実家に帰ると早く孫を見せてくれとばっかり言っている。２人ともとっても長生

きしそうだから焦らないでも大丈夫そうだけどなといつも思ってしまう。勿論、口には出さないけれど。

とにかく私は幸せに生活を送っている。そして、これからも幸せだと思う。だって隣には春斗がいてくれるから。

俺もとうとう今年で２３歳か。時の流れは早いものだと感じる。

あれから色々な事が変わった気がする。まず第一に俺自身。瑞穂を幸せに出来るようにと必死で勉強やら何やらを頑張った。その成果もでてなんとか就職も一流企業に就職できた。ここまで上手くいくとは内心思っていなかった。

他にも瑞穂の両親との関係が変わった。大きくは変わっていないんだけど何か２人の態度が少し変化していたのだ。最初は何なのか俺と瑞穂には分からなかったけど、最近になって分かってきた。２人は孫の姿を早く見たいと思っていたらしい。いくらなんでも、高校生だった俺達にそれを要求するって今考えてもおかしすぎる事だ。

俺と瑞穂が正式に付き合う事になると竜馬は威張った顔でこんな事を言っていた。

「俺はやっぱりそうなると思ってたよ」

まぁ、それが竜馬らしい気もしたんだけど。

１番心配していた藤堂先輩との関係は特に何も変わらなかった。俺

と瑞穂が付き合い始めたのを聞いたときはショックそうな顔だったけど、１週間後には吹っ切れた顔になっていた。

真奈美先輩は俺と瑞穂が付き合ったのをしると、

「やっぱり私の予想は当たってたわ。瑞穂は春斗君の事が好きだったから無意識のうちの留年を選んだのね」

と言っていた。瑞穂はそれを聞いて頷きながらそうだねと言っていた。

話は変わるけど俺は今、ある重大な計画を経てている。その計画の結構予定日は１ヵ月後の６月１２日。瑞穂の誕生日の日だった。

俺はその日に瑞穂に結婚を申し込むつもりだった。瑞穂の好きなエメラルドの指輪を渡して。

瑞穂が承諾してくれるかは分からない。まだ早いからと言ったりするのかも知れない。でも、俺は大丈夫だと思っている。これはどちらかというと確信に近いものがある。根拠は一切ないのだけど。とにかく１ヵ月後が楽しみだ。

俺は今、世界中の誰よりも自分が幸せだと思っている。自惚れなんかじゃなく本気でそう思っている。小さい時から想い続けた相手が側にいてくれるのだから。

そして・・・

きっとこれからも・・・

俺は幸せであり続けられると思う。

瑞穂と一緒に。

Ｌａｓｔ　Ｅｐｉｓｏｄｅ：春斗＆瑞穂～幸せなエピローグ～（後書き）

最後まで読んで下さった方々、本当にありがとうございます。当初、この作品は１０話程度の予定だったんですけど、倍になってしまいましたね。とにかく作者としては完結できた事を嬉しく思っています。次回作の方もよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9893d/

暖かな恋

2010年10月29日05時34分発行